

# 雪の女王

石井勲編



漢字絵本 4



惡魔



# 鏡

悪魔は、美しい物を醜く写す鏡を作りました。

昔、ある町に、カイという

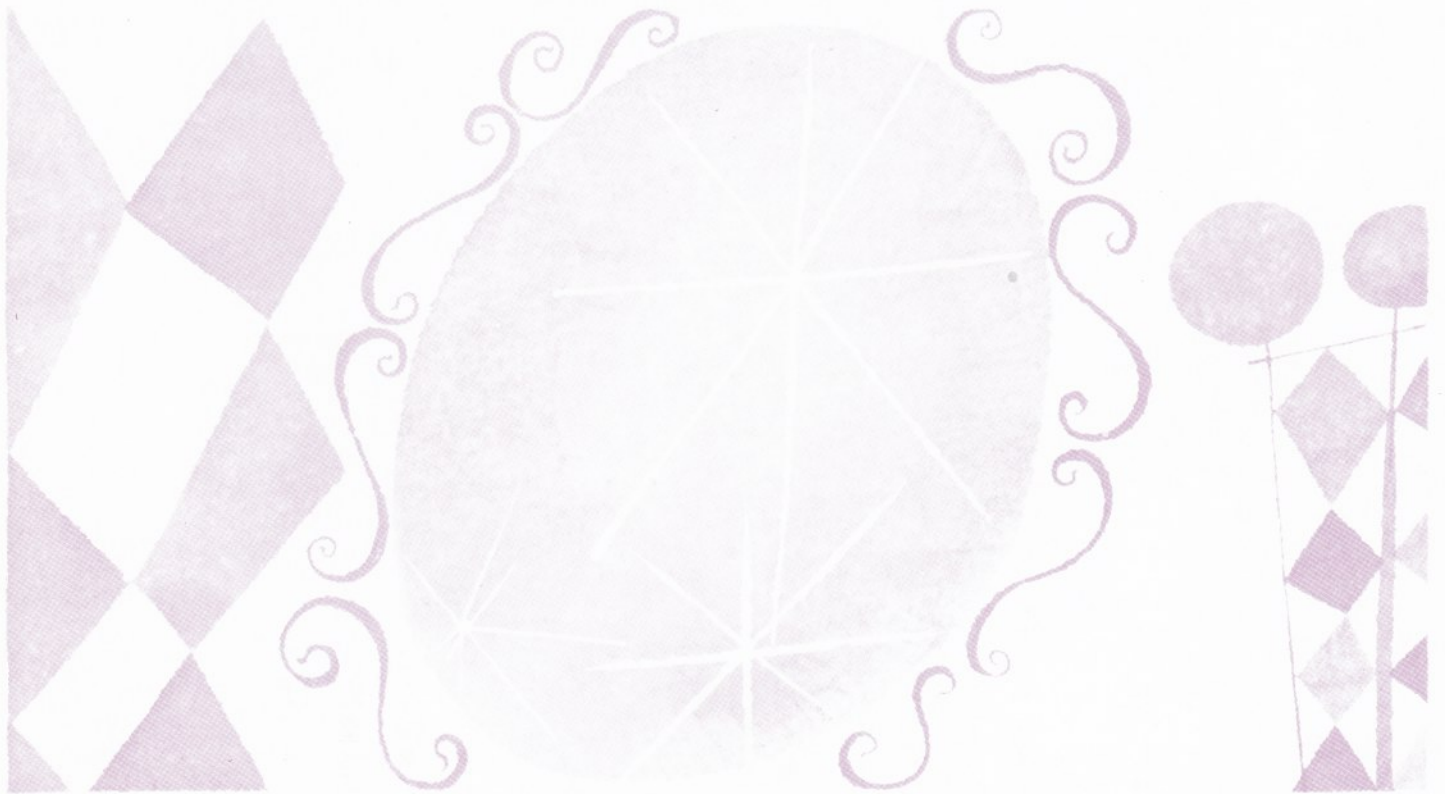
男の子と、ゲルダという

女の子が住んでいました。

二人とも、心の優しい、

良い子供でした。

ある時、悪魔の作った鏡が  
粉々に砕けて世の中に飛び散  
り、多くの人々の心や目に  
突き刺さった時、その一つが  
カイの心や目に突き刺さった  
ので、カイは、意地悪で乱暴  
な子になってしまいました。



ある日、ゲルダと

カイが遊んでいますと

どこからか美しい

そりがやって来ました。

カイは、そのそりに


自分のそりを

結び着けたので、

そのまま遠い国へ

連れ去られて

しまいました。



雪の女王は、アンデルセンの長編童話です。ここではほんのあらずじしか述べられませんでしたが、しかし、心の優しいゲルダが、優しい鳥、優しい魔女など、至る所で、暖い心づかいを受け、最後にカイを助け出すまでの美しい行為の数々を、子供たちの心に伝えてやりたいと思います。できたら、この文に適切な肉づけをして、物語りを大いに盛上げてほしいと思います。

美しい人

どこからか、美しい人を乗せた  
そりがやって来ました。



# 雪

トナカイ



ゲルダは心配して、カイの  
帰りを待ちましたが、何日  
たっても帰って来ません。

冬が過ぎて春が来た時、  
ゲルダは、カイを捜しに旅立  
ちました。

雀たちにカづけられて旅を  
続けて行くうちに、桜の園に  
やって来ました。そこには、  
お婆さんがいて、ゲルダを  
親切に迎えました。



おとなには迷惑な雪  
や氷も、子供たちにと  
っては、すばらしい自  
然の贈り物です。空か  
ら白いものが舞い降り  
て来るのを見た時、思



お婆さんは、

心の優しい魔女で、

かわいそうなゲルダを、

いつまでも桜の園に

置いてやりたいと思い、

カイのことを忘れる

魔法をかけました。



わず歓声を上げ、踊り  
回ったこと、また、寒  
い朝、登園登校の途上  
で、水たまりの凍った  
所を求めて歩き、競っ  
てその上を滑って遊ん  
だことなど、どなたの  
思い出の中にもきっと  
あるに違いありません。  
子供にとっては、雪  
や氷はあこがれでもあ  
り、夢でもあるのです。  
そして、雪や氷を見る  
たびに、「雪はなぜ降  
るのだろう」とか、  
「氷はなぜ凍るのだろ  
う」とか、幼い頭の中  
で絶えず疑問を湧かし、  
あれこれと想像を回ら  
しているのです。



# 家

お婆さんは心の優しい魔女で、  
ゲルダに、カイのことを忘れる  
魔法をかけました。



お婆さん

魔女

ゲルダ

川

花

長い月日が

過ぎたある日、

ふと魔法が解けて、

ゲルダはカイのことを

思い出し、桜の園を

逃げ出しました。

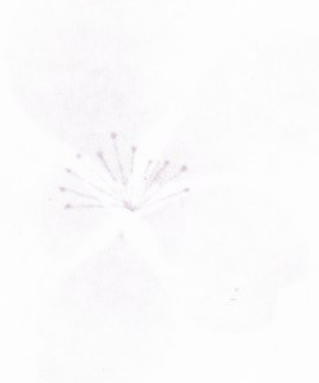
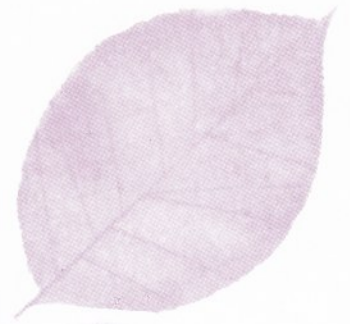
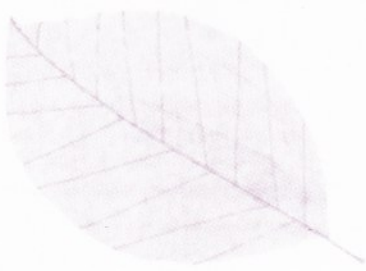
旅を続けていますと、

一羽の鳥が、

「お城にカイらしい

男の子がいる」

と教えてくれました。



しかし、それは、科学的な真実を求めているわけではありません。その証拠には、この頃の子供たちに、科学的な知識を与えても、決してこれを喜んで受け

ゲルダは喜んで、

鳥の案内で

お城に行きました、

それはカイでは

ありませんでした。

お城の女王様は、

ゲルダをかわいそうに

思っ、美しい服と

馬車を下さいました。

入れることをしません。

もちろん、幼児には、

まだそれが理解できる

だけの素地のできてい

ないこともあります。

しかしそれ以上に、子

供たちは客観の世界よ

りも空想の世界に生き

ていて、科学的な真実

など全く関心がないか

らです。

幼児期というのは、

そういう空想の世界に

生きることによって、

精神活動を思う存分に

発揮させる時期なので

す。そうしてこそ、成

人した時に、創造性豊

かな人間になることが

約束されるのです。

# 女王様



車

お城の女王様は、ゲルダに  
美しい服と馬車を下さいました。

お城

林



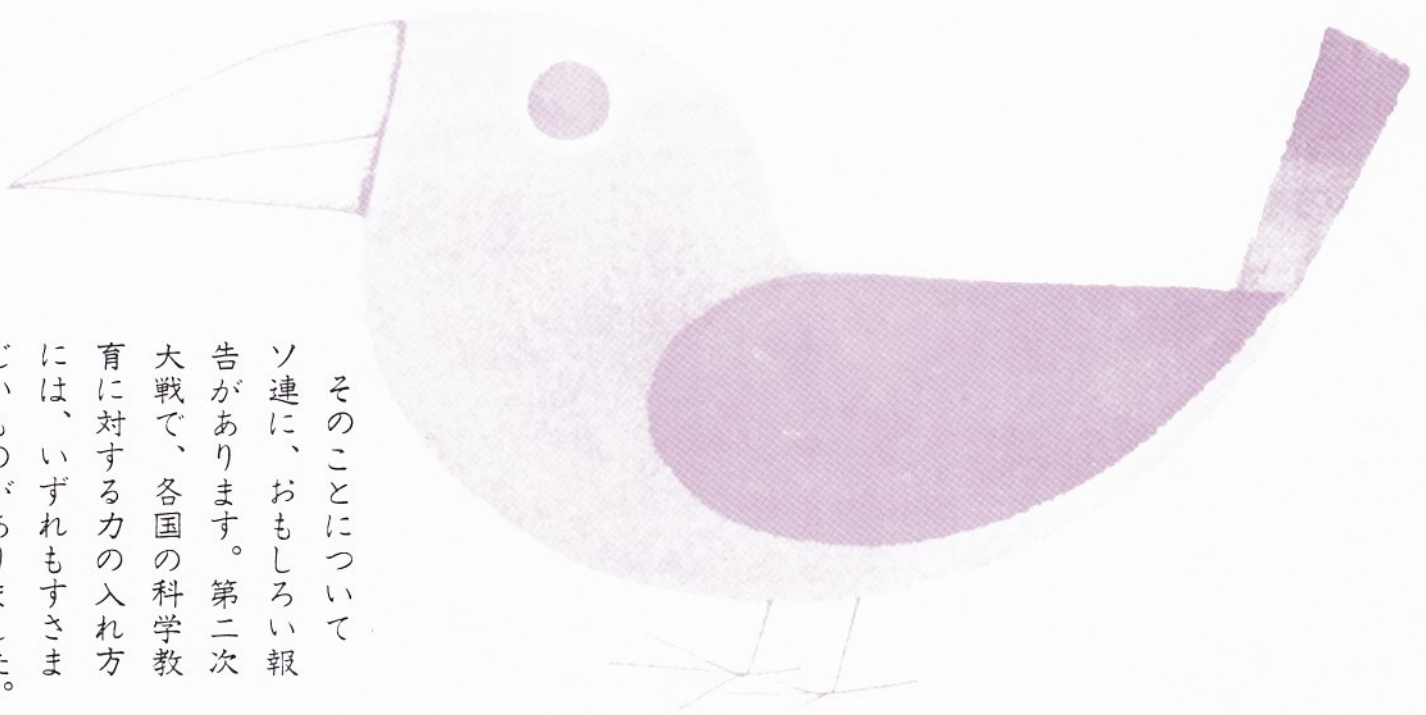
馬車に乗って、旅を続けていたゲルダは、森の中で山賊に襲われました。殺され

そうになった時、山賊の娘が、ゲルダを助けてくれました。

ゲルダは、お礼に美しい服を娘にやりました。

一羽の鳩が、

「雪の国にカイがいる」と教えてくれました。



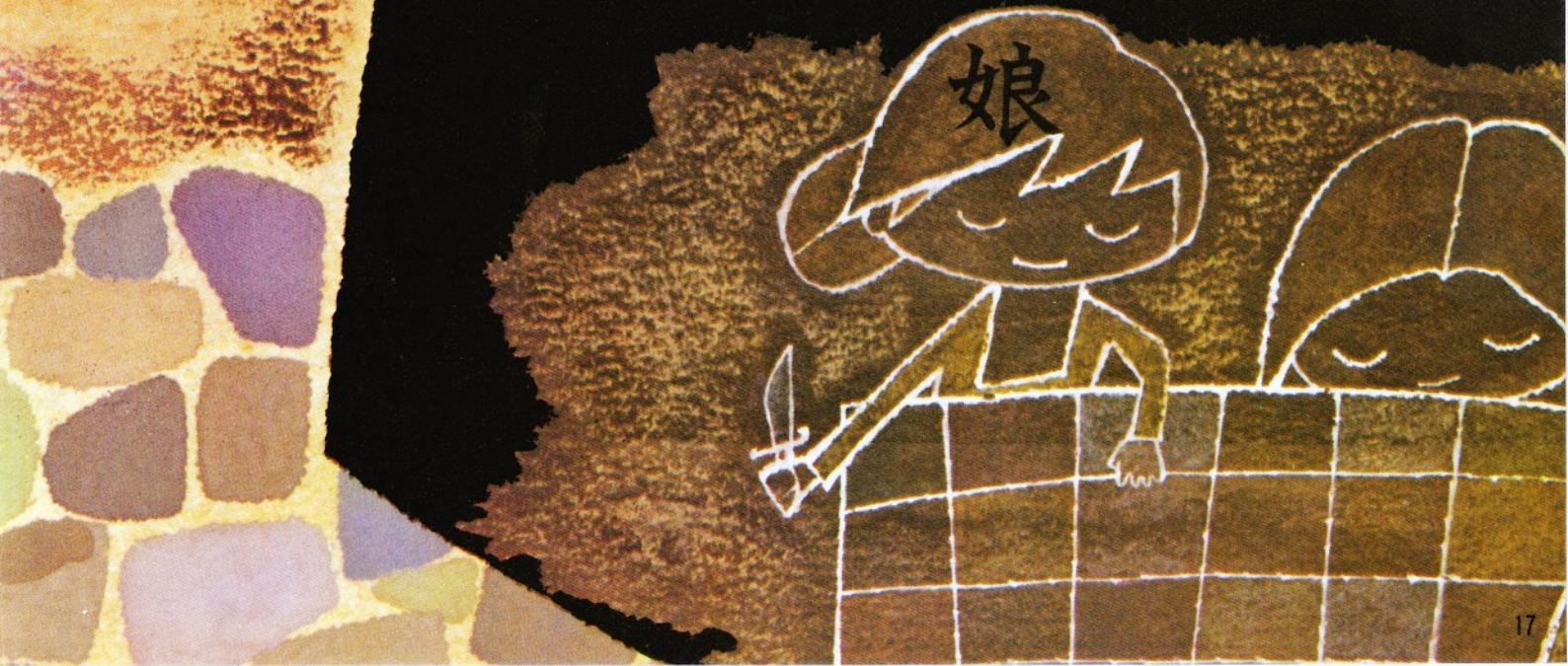
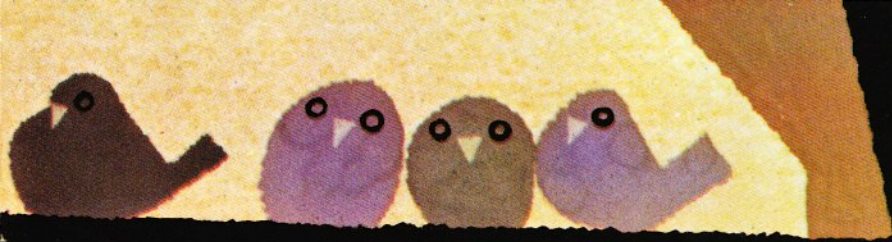
そのことについてソ連に、おもしろい報告があります。第二次大戦で、各国の科学教育に対する力の入れ方には、いずれもすさまじいものがありました。




山賊の娘は、  
そこへ行く道を  
よく知っている  
トナカイをゲルダに  
贈り、そつと逃がし  
てくれました。  
ゲルダは、  
娘にお礼を言い、  
雪の国に向って  
出発しました。



ソ連でも、とりわけ  
科学教育の振興に力を  
入れましたが、その一  
つとして、今までの荒  
唐無稽のおとぎ話は、  
子供の科学的思考を育  
てるのに害があるとの  
理由で、幼児からこれ  
を一切遠ざけたのです。  
ところが、そういう  
おとぎ話から遠ざけら  
れた幼児ほど、逆に、  
荒唐無稽な世界を求め  
その世界に閉じこもっ  
てそれから抜け出るこ  
とが困難になる、とい  
うことがわかったので  
す。

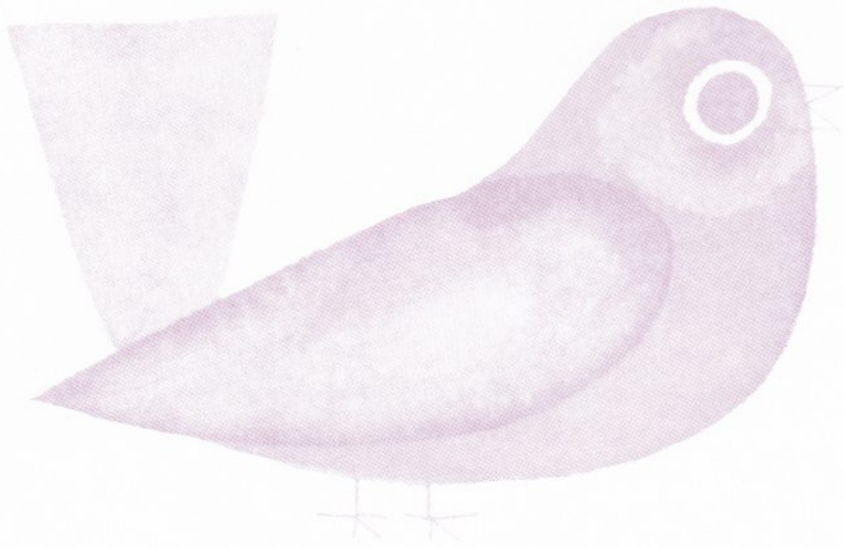


An illustration of a house with a dark roof and a yellow wall. A wooden door with a circular handle is on the left. A stone path leads to a large fire. A black pot sits on the fire. Four birds are on the roof. The Japanese text is on the right.

山賊の娘が、  
ゲルダを助けてくれました。

火

雪の国に近づくと  
つれて、冷たい風が、  
身を切るように  
吹きつけます。  
やがて、雪の軍勢が  
攻めて来ました。  
それは、大きな雪の  
塊で、気味の悪い  
動物のようです。



つまり、幼児から夢  
の多いおとぎ話を奪う  
ことは、少しも科学的  
な思考を育てることに  
ならないばかりか、却  
って、いつまでも子供  
を空想の世界に取り残  
す、という結果になり、  
科学教育の振興に有害  
であることがわかった  
のです。  
私たちの考えること  
には、よくこのような  
見込み違いがあるもの  
です。私たちの常識的  
な判断が、全く当てに  
ならないのです。

けれども、ゲルダは、  
恐れずに進みました。  
ゲルダのお祈りの  
息の中から天使が  
現れて、雪の軍勢を  
溶かしてしまいました。  
それで、ゲルダは、  
雪のお城の中に  
入ることができました。



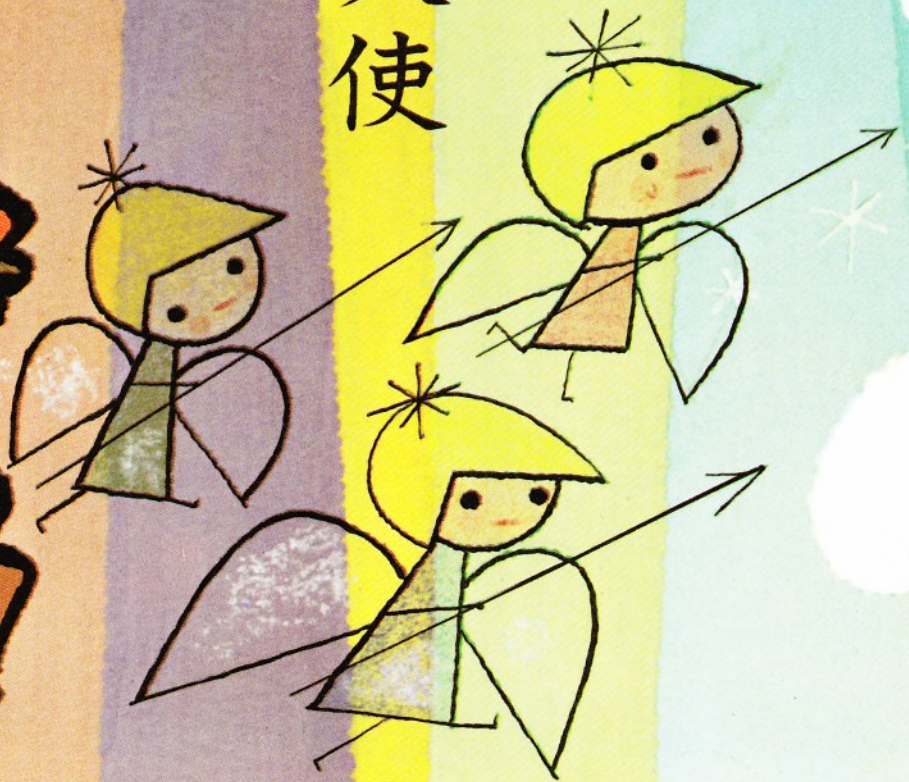
「漢字はむずかしいから、かなから先に学ばせよう」という考えも、この例です。明治以来、百年もの間、この見込み違いの教育を続けて来たのです。しかも、この教育では、その誤りがなかなか自覚できませんでした。六歳の幼児にかなを学ばせるよりも、三歳の幼児に漢字を学ばせることの方が、ずっとたやすいことは、これを比較実験してみれば、だれにもすぐわかることですが、そうしてみない限り、なかなかわかるものではありません。



ゲルダの息の中から天使が現れ、  
雪を溶かしてしまいました。

雪

天使



お城の中にカイがいました。  
けれども、カイは、氷の中に  
死んだようになっていて、  
身動き一つしません。

ゲルダは、悲しくなって  
涙を流して泣きました。

その熱い涙がカイの胸に  
こぼれ落ちると、心の中に  
浸み込んでいき、あの魔法の  
鏡のかけらを溶かして  
しまいました。





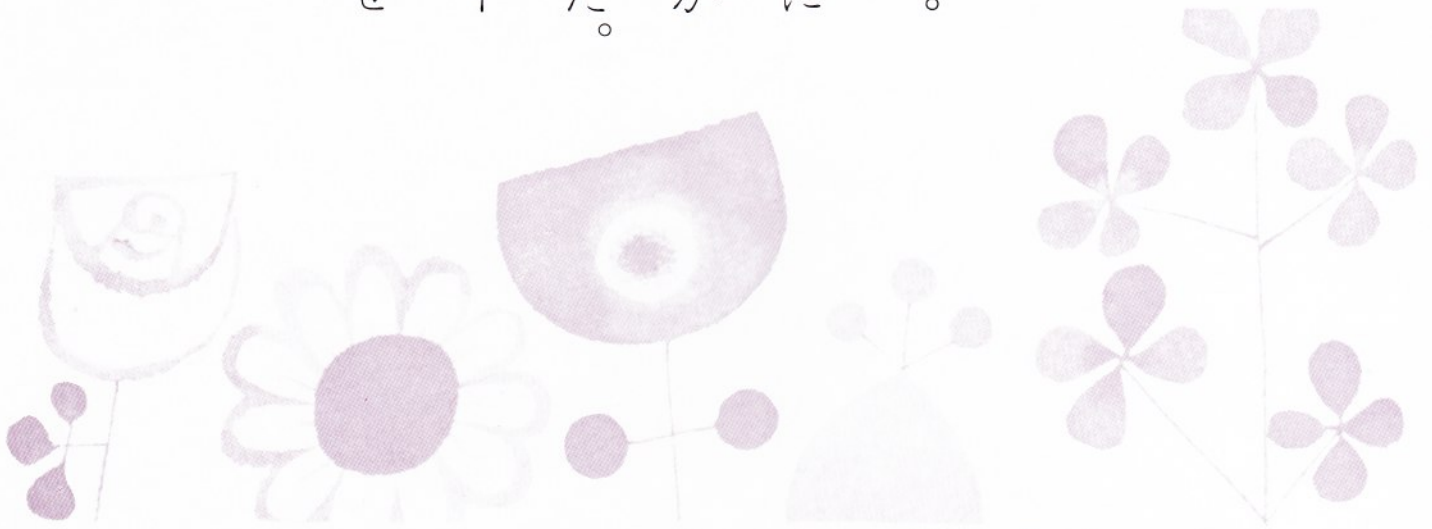
カイは、ゲルダの涙で  
やっと気がつきました。

二人は、急いで雪のお城を  
脱け出すと、元来た道を

どんどんと逃げて行きました。

カイとゲルダがやっと家に  
着いた時、庭には、春の花が  
いっぱい咲き出していました。

元の優しい心に帰ったカイ  
とゲルダは、仲良く、しあわせ  
に暮したということでした。



“美しい”“冷たい”とい  
う形容詞が提出されて  
います。これらの抽象  
的な言葉は、実生活の  
経験に結びつけた、し  
かも長期間にわたる反  
復使用がなければ、な  
かなか正しい理解がで  
きるものではありません  
。また、“冷たい—  
熱い”というように反  
対語と組にして理解さ  
せることも大切なこと  
です。

雪のお城

青い空

カイは、氷の中に  
閉じ込められて、  
死んだようになっていました。


カイ

ゲルダ





冰



この絵本は、幼児に読んで聞かせるための絵本です。漢字が多いので読みやすく、幼児の表情を伺いながら読むことができます。だから、この本を使いますと、幼児は本を読んでもらうことの楽しみを知り、繰り返して読んでくれるよう求めます。こうして、幼児はすっかり文を覚えてしまい、本を読むまねを始めます。そうなれば、自然と文字も読めるようになります。でも、文字を教え込もうと思っははいけません。子供が自然に読めるようになるのを待つことです。

石井勲の漢字教室 別巻 4  
本好きになる漢字絵本 4

発行 双 柿 舎  
東京都中央区銀座4-14-11  
電話 03(545)2250(代表)